

技芸を磨く実学の奨励

“ふじのくに”の未来を担う「有徳の人づくり」を進める静岡県。

そのためには、一人一人の能力や適性などに応じてそれぞれが持つ優れた資質を十分に伸ばしていく教育を社会全体で進めることが重要だ。今回は本県が進める「有徳の人づくり」、中でも「技芸を磨く実学の奨励」に注目した。

実学で専門的職業人を育成

有徳の人づくりを推進している本県は、「技芸を磨く実学の奨励」「知性を高める学習の充実」「学びを支える魅力ある学校づくりの推進」の3本柱で「文・武・芸三道の鼎立」を目指す教育の実現」を進めている。中でも、生きる力が身に付く実学は、優れた人材を育て、地域産業の発展に貢献できる能力を育てる場となるため、本県では、その奨励を重点取り組みの一つとして掲げている。

「技芸を磨く実学の奨励」は、

農林水産業、工業、商業、商業、芸術等の分野において実践的な教育を開拓し、一人一人の能力、適性、意欲に応じた、多様で柔軟な技術習得を促す取り組みだ。

例えば、先端設備を導入した工業系の高校「マーケティングや情報化に対応した商業系の高校、あるいは6次産業化を主力とする農業系高校等で高度な実学教育を推進する。そうすれば、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成でき、結果として県全体の活性化につながる。

一方、人手不足に直面している県内企業の中には、高校に対して基礎学力とコミュニケーション能力を持った即戦力の



実学チャレンジフェスタで植物の種の選別体験をする来場者。小学生の目が好奇心で輝いていた。

人材を期待する声もあり、専門高校等の教育内容が伝わっていない側面もある。そこで本県は、社会の変化に柔軟かつ主体的に対応できる能力と、産業界で必要になる高度な知識や技能を身に付けることができる実学の良さを、県民に広くアピールするため平成28年度から「ふじのくに実学チャレンジフェスタ」を開催している。

実学の祭典で大きな変化

昨年11月、「第3回ふじのくに実学チャレンジフェスタ」が沼津市のプラサヴェルデで開催された。

実学とグローバル教育の融合

催された。県内の実学系公立高校全42校が出展した会場には、各校の特色を記したパネル展示とともに、具体的な学習成果を発表するブースがあり、来場者の注目を集めた。農業系では生徒が栽培した苗や食品の販売、商業系では地元企業とコラボレーションして開発した商品の販売、工業系では電子工作とプログラミング体験、福祉系では介護実演、芸術系では書道パフォーマンス等が行われ、より実用的な成果に会場は沸いた。来場者の中には各校の発表に強い興味を抱く小中学生の姿も数多く見られた。

同フェスティバルは、参加した高校生の意識も変えた。発表の機会によって“伝える”喜びを学び、技芸への自信を深めた意義は大きい。また、他校との交流を通じて、実学の可能性を見出し、他分野との協働を模索する動きも生まれた。専門的な技芸ゆえに他分野との連携が進み

にくい実学にとって、この変化は画期的だ。本県は地域ぐるみ、社会総がかりで実学を奨励し、ジャンルの垣根を越える大きな成果に期待している。

シップ事業」だ。この取り組みは平成27年度から始まり、平成28年度からは、県と民間からの寄附等による「ふじのくにグローバル人材育成基金」を活用して行っている。職業系専門学科、総合学科や普通科で職業に関する専門科目(農業、工業、商業、芸術等)を履修している生徒が対象だ。

羽ばたく若者を静岡から応援

県は今年度から、県内の高校等を卒業する生徒の全員にQRコードを記載した「ふじのくにパスポート」を発行する。ホームページを通して、素晴らしいふるさとの魅力を継続的に発信していく新たな取り組みだ。

技術を磨き、国際感覚を身につけた若者が、夢に向かって進む道はそれぞれだが、静岡で育つたことを忘れず、いつまでもふるさとつながっていてほしいという思いがパスポートに込められている。

若者の夢や希望を育てる環境づくりを通して有徳の人づくりを進める静岡県。「技芸を磨く実学の奨励」は、若者だけでなく、教育現場や県内企業の意識にも変革をもたらし、地域の可能性を高めている。

自動車部品メーカーのタイ工場で就労体験をする県内の高校生。「この経験を将来に生かしたい」という感想が圧倒的多かった。



社会の第一線で活躍できる専門的職業人の育成を図る本県の実学奨励事業は、グローバル教育にもおよぶ。県内企業の海外工場で就労体験等を実施する「高校生海外インターナンス」は、介護実演、芸術系では書道、音楽系では電子工作とプログラミング体験、福祉系では介護実演、芸術系では書道パフォーマンス等が行われ、より実用的な成果に会場は沸いた。来場者の中には各校の発表に強い興味を抱く小中学生の姿も数多く見られた。

同フェスティバルは、参加した高校生の意識も変えた。発表の機会によって“伝える”喜びを学び、技芸への自信を深めた意義は大きい。また、他校との交流を通じて、実学の可能性を見出し、他分野との協働を模索する動きも生まれた。専門的な技芸ゆえに他分野との連携が進み